

平成二十四年も残りわずかとなりました。職場に感謝し、大清掃や整理整頓など、後始末を実施して新年を迎える準備をする企業・店舗も多いことでしょう。

古来、日本では正月に歳神(としがみ)を迎える習慣があり、新しい歳神を迎える準備として大清掃・被い清めを行ない、清浄な場である証として注連縄を飾り、玄関先に目印として門松を置くことが大掃除の始まりといわれています。古くは十世紀に宮中で清掃をつかさどる部署が設けられ、「すす払い」が行なわれたとされ、鎌倉時代に書かれた歴史書『吾妻鏡』に「この行事が記述されています。

これが風習となったのは江戸時代で、十二月十三日に江戸城の「すす払い」を行なうことを決めたことが始まりです。その名残は仏閣の毎年の行事として現代も続いています。

清掃は衛生面や仕事の効率からみても重要ですが、清掃は単なる物や場をきれいに整理整頓するだけでなく、自他共に心を清らかにする方策です。机や床の乱雑や機械汚れ・故障などを放置する環境では、倫理道徳観が失われる傾向があるとされています。

倫理運動の創始者・丸山敏雄は、清掃を心を磨く道として捉え、心身を清浄にし、わがままを除き、本来の自分に立ち返る実践として捉え、清掃の実践を慣行することを勧めています。「後始末とは物事の終点であると同時に出発点でもある」とし、見事な後始末がスタートダッシュに繋がることを語っています。

旧年の汚れを払い 希望ある新年を仰ぐ



また「物質に対する倫理」として喜んで受ける、好き嫌いをせぬ、心を込めて大切に遣う、その物のよさを知る、物に対する礼を尽くす、十分に働かず、管理を十分にする、物の恩を感じ、それを現実にする礼をとる、物質に対する後始末を完結する、我が同胞(はらから)と思う。以上のようにも述べています。

一年の締めくくりとして、お世話になった道具類の整理整頓や機械・職場などの清掃をする際は、明朗な心を持って取り組みましょう。その実施にあたっては、改めて前述の10項目を見つめ直し、物への感謝の念を深める機会としたいものです。

今年は様々な耳を疑うような事件が起こり、日本経済はデフレの長期化など厳しい状況が続いている中、政権が変わり、時代は大きく変わるうとしていきます。その反面、二月二十九日には東京都墨田区に世界一の自立電波塔となる「東京スカイツリー」が竣工し、五月二十一日には開業するという明るい話題もありました。

このような大変動の時であるからこそ、一年間の節目に企業の機動力を高める、また豊かな人を育てる最高の時として隅々まで場を整えましょう。それと同時に、一年間で身につけた穢れや虚偽・虚飾の一切をかなぐり捨て、清浄無垢の己に戻って清々しい心境で希望ある未来を見据え、堂々と新しい年を迎えたいものです。

絵・今谷 鉄柱